

S3章 態

「態」の基本について説明します。

S3.1 「態」とは (50)

S3.2 許容態 -e- (52)

t① 他動 -e- (53)

t② 自然生起 -e- (54)

t③ 可能 -e- (55)

t④ 態補強 -e- (56)

S3.3 原因態／原因基 -(s)as- / -(s)as-e- (58)

t⑤ 直接他動 -(s)as- / -(s)as-e- (59)

t⑥ 指示他動 -(s)as- / -(s)as-e- (60)

t⑦ 結果招来 -(s)as- / -(s)as-e- (61)

t⑧ 不阻止 -(s)as- / -(s)as-e- (62)

可能の原因基 -(s)as-e- , 二重原因基 -(s)as(-e)-(s)as(-e)- (63)

S3.4 受影態／受影基 -(r)ar- / -(r)ar-e- (66)

t⑨ 受影 -(r)ar- / -(r)ar-e- (67)

t⑩ 自発 -(r)ar- / -(r)ar-e- (68)

t⑪ 可能 / -(r)ar-e- (69)

t⑫ 尊敬 / -(r)ar-e- (70)

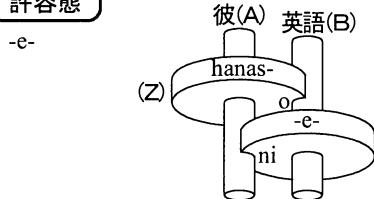
原因受影基 -(s)as(-e)-(r)ar-e- , -(s)as-e-sas-e-rar-e- (71)

S3.1 「態」とは

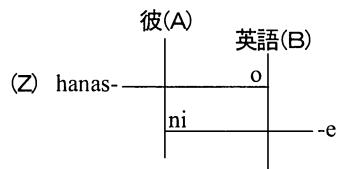
12. 1

「態」とは、ある主体Aと属性Zが結びつくことに対して、実体Bが許容者・原因者・受影者として関わりを持つことをいいます。「許容態・原因態・受影態」の3つがあります。複合による「基」(原因基・受影基など)もあります。

許容態



図S3-1 英語(B)が 彼(A)に 話せる (hanas-e-ru)

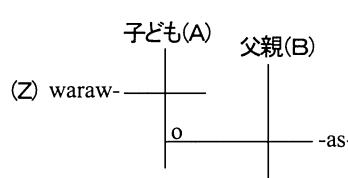
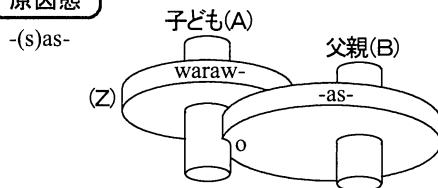


図S3-2

主体Aと属性Zが結びつくことの許容者（許容する者）がBです。

態属性は -e- です。動詞が tabe- のような母音末のときは直接付きません。

原因態



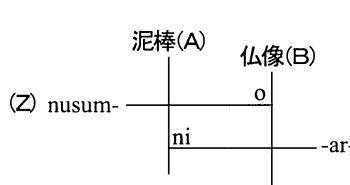
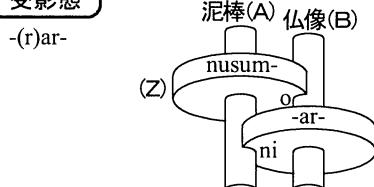
図S3-3 父親(B)が 子ども(A)を 笑わす (waraw-as-u)

図S3-4

主体Aと属性Zが結びつくことの原因者（原因となる者）がBです。

態属性は -(s)as- です。 (s) は動詞が tabe- のような母音末のとき出現します。

受影態



図S3-5 仏像(B)が 泥棒(A)に 盗まる (nusum-ar-u)

図S3-6

主体Aと属性Zが結びつくことの受影者（影響を受ける者）がBです。

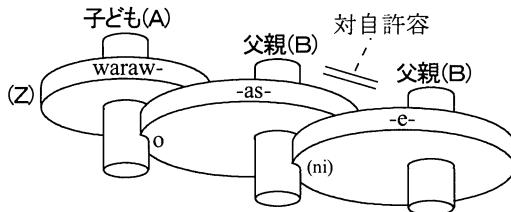
態属性は -(r)ar- です。 (r) は動詞が tabe- のような母音末のとき出現します。

態の基

「基」とは複数の詞が複合して1要素として機能するもの(S1.7)で、以下のほかに「二重原因基」「原因受影基」等があります。

12.5

原因基
-(s)as- と
-e- の複合

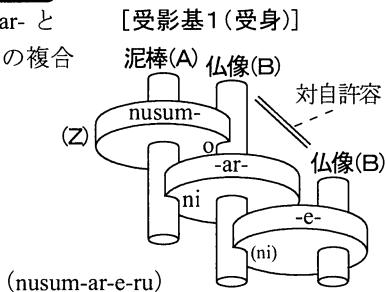


図S3-7 父親(B)が 子ども(A)を 笑わせる (waraw-as-e-ru)

主体Aと属性Zが結びつくことの原因者となることをB自身が許容します。

受影基

-(r)ar- と
-e- の複合

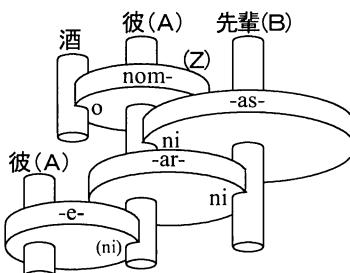


図S3-8 仮像(B)が泥棒(A)に 盗まれる 図S3-9 彼(A)が納豆(B)を 食べられる
Bが主体Aと属性Zが結びつくことの受影者となることを

受影基1ではB自身が、受影基2ではAが、許容します。

原因受影基

-(s)as- と
-(r)ar- と
-e- の複合



図S3-10 彼(A)が 先輩(B)に 酒を 飲まされる (nom-as-ar-e-ru)

「使役受動基」ともいえます。主体AがBによる使役の受影者となります。

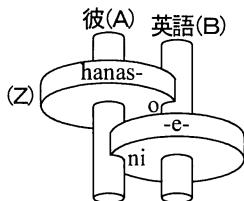
S3.2 許容態

-e-

12.4, B3章

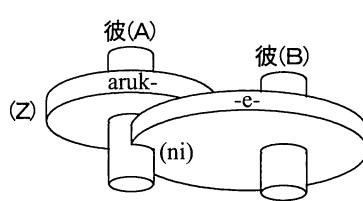
「許容態」では、主体Aと属性Zとが結びつくことに対して、Bがそれを許容する主体として関わりを持ちます。AとBが異なる実体である「対他許容」と、AとBが同一実体である「対自許容」の2つがあります。

[対他許容]



図S3-11 英語(B)が話せる(る)

[対自許容]



図S3-12 彼(A)が歩ける(る)

[対他許容] 「英語が話せる」では、彼Aが「英語を話す」という属性と結びつくことを英語Bが許容します。許容態 -e- は「彼」に「に格」で関わっていますので「彼には(は)英語が話せる」と言うこともできます。

[対自許容] 「彼が歩ける」では、彼Aが「歩く」という属性と結びつくことを彼自身Bが許容します。許容態 -e- は「彼A」に「に格」で関わっているはずですでの、構造図では (ni) のように示します。「彼には歩けない」「私には立てない」のように、否定の場合は「に」が確認できます。

表S3-1 許容態 -e- の4分類 ……どのような出来事をどのように許容するかで分類

-e- の意味		-e-の対自・対他		例
t① 他 動	▲	対他		彼は仕事を susum-e-
t② 自然生起	▽	対他		枝が or-e-
t③ 可能	t③a 対他可能	対他	彼に／が英語が hanas-e-	[通常可能]
	t③b 対自可能		彼に／が窓側の席が tor-e-	[幸運可能]
t④ 態補強	▲▽	対自	彼が英語を hanas-e-	[通常可能]
			彼が窓側の席を tor-e-	[幸運可能]
t④ 態補強 ▲▽		対自	水が mor-e- / 茶を motom-e-	

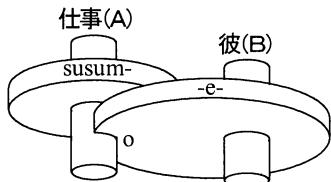
t①では許容主は意志・制御をもって許容しますが、t②、t③、t④では許容は文法修辞的な許容であり、許容主は許容に対する意志・制御を持ちません。

許容態の表の t①～t④をひとつずつ見ていきます。

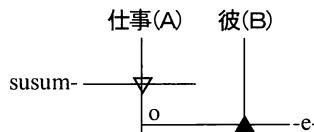
t① 他動

-e-

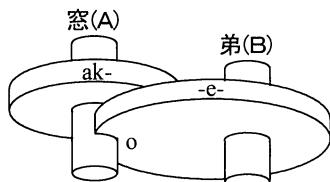
「他動」とは、主体Aと属性との非意志的な結びつきを、Bが意志と力で対他許容をして実現するものです。この-e-についてできた動詞は他動詞として扱われます。



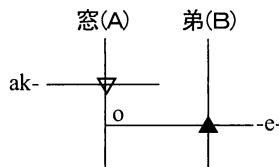
図S3-13 彼(B)が 仕事(A)を進め(る)



図S3-14



図S3-15 弟(B)が 窓(A)を開ける



図S3-16

上図において、仕事Aも窓Aも非情物ですので、属性 susum- / ak- と結びつくことについて意志を持ちません(▽)。一方、許容主体である彼B、弟Bは基本的には意志と力を持って、その結びつきの実現に関わります(▲)。

Aに意志の存在を見る場合は、この「他動」の許容態 -e- よりは行為指示他動の原因基-(s)as-e- を使用することが多いです。動詞との意味関係によります。

例：児童を tat-as-e- る／彼を yasum-as-e- る (Aに意志の存在を見る。)

[参考：旗を tat-e- る／手を yasum-e- る (Aに意志の存在をみない。)]

t①の属性は自動詞ですが、-e- がついた形は他動詞として認識されます。このような自動詞の例として次のようなものがあります。

浮かぶ ukab-

沈む sizum-

育つ sodat-

立つ tat-

付く tuk-

続く tuzuk-

並ぶ narab-

休む yasum-

歪む yugam-

問S3-1 「立てる／休める」は、なぜ他動のほかに可能(t③)にもなるのですか。

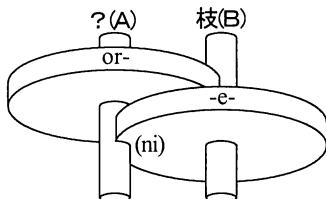
問S3-2 「育てる／歪める」は、なぜ他動だけで、可能にならないのですか。

問S3-3 何を「並べ」、何を「並ばせ」ますか。

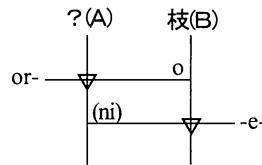
t② 自然生起

-e-

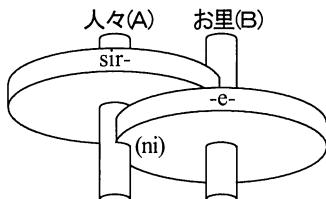
「自然生起」とは、意志が重視されない主体Aと属性との結びつきを、目的語Bが許容するものです。主体Aに意志を認める場合は「t③可能」になります。



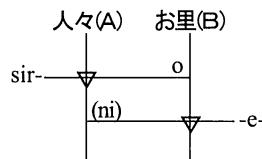
図S3-17 枝(B)が折れる(る)



図S3-18



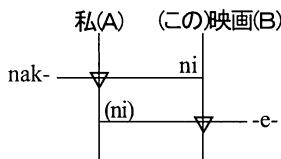
図S3-19 お里(B)が知れる(る)



図S3-20

「(自然に)枝が折れた」というとき、何が枝を折ったのか不明です。「お里が知れる」というときは「世間の人々」が知るはずですが、知ろうとする意志は感じられません。つまり、Aは不明な主体か意志をみない主体です。動詞の「を格」にある目的語が許容主体になります。

「(自然に)泣ける映画」のように「に格」にある実体が許容主体になることもあります(右図)。「あの話は(自然に)笑える」の場合も同様です。



図S3-21 この映画が(いちばん)泣ける(る)

t②の属性は他動詞ですが、-e- がついた形は自動詞として認識されます。このような他動詞の例として次のようなものがあります。

碎く kudak-

裂く sak-

解く tok-

抜く nuk-

剥ぐ hag-

開く hirak-

見る mi-

焼く yak-

割る war-

問S3-4 「この本は売れる」の自然生起と可能の場合について説明できますか。

問S3-5 「彼には手が焼ける」「彼は気が置けない」の構造を示せますか。

t③ 可能

-e-

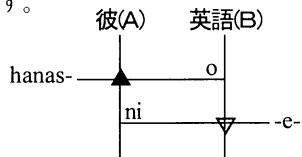
「可能」とは、意志を持つ主体Aと属性との結びつきを許容主体Bが許容するものです。

制御可能なら通常の、不可能なら幸運の可能となります。
対他、対自許容があり、対他には二重主語もあります。

t③a 対他可能

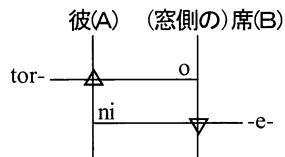
対他ではAとBは異なる実体です。

[通常可能] 彼Aには英語を話す意志があり、
制御もできます。
このときの可能は通常の可能です。



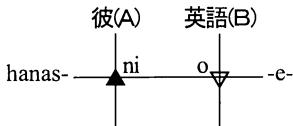
図S3-22 (彼に)英語が話せ(る)

[幸運可能] 彼Aには窓側の席を取る意志はあります、制御はできません。
このときの可能は幸運な可能になります。

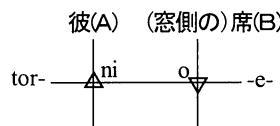


図S3-23 (彼に)窓側の席が取れ(る)

[二重主語] 'hanas-e-, tor-e-' をそれぞれ1属性のように扱うと、A Bの両方が主格に立つことになり、二重主語になります。



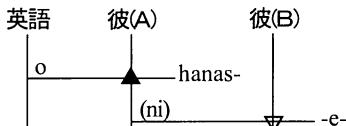
図S3-24 彼(が)は英語が話せ(る)



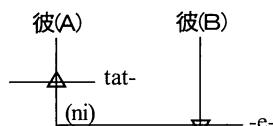
図S3-25 彼(が)は窓側の席が取れ(る)

t③b 対自可能

Bが同一実体であるAと属性との結びつきを許容する場合は「対自可能」の形になります。



図S3-26 彼が英語を話せ(る)



図S3-27 彼が立て(る)

問S3-6 「英語を／が話せる」ではなぜ「を／が」の両方が可能なのですか。

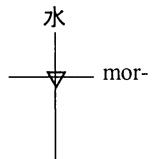
t④ 態補強

-e-

「態補強」とは、原動詞が -e- により自動詞性・他動詞性を明らかにするもので、意味は変わりません。対自許容の形をとります。意志・制御はAB同じです。

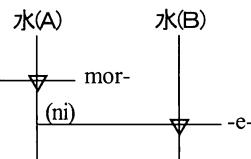
古語の自動詞を態補強して現代語の自動詞に

[原動詞]



図S3-28 水の1漏(る)

[現代語動詞]



図S3-29 水が漏れる(る)

t④の原自動詞の例

明く ak-

冷む sam-

果つ hat-

-e- がついても意味は変わりません。

消ゆ kiy-

流る nagar-

更く huk-

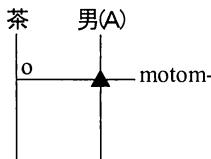
暮る kur-

逃ぐ nig-

臥す hus-

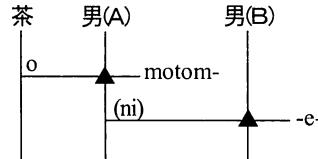
古語の他動詞を態補強して現代語の他動詞に

[原動詞]



図S3-30 男の1茶を求(む)

[現代語動詞]



図S3-31 男が茶を求め(る)

t④の原他動詞の例

受く uk-

下ぐ sag-

告ぐ tug-

-e- がついても意味は変わりません。

憂ふ ureh-

授く saduk-

分く wak-

超ゆ koy-

捨つ sut-

忘る wasur-

問S3-7 「大学を受ける」「大学に受かる」の uk- は同じ意味ですか。

問S3-8 「続ける／煮える／歩ける／漏れる」の中の -e- の違いは何ですか。

次ページから 「S3.3 原因態／原因基」 です。

コラム1

B7 章

「碎ける波」は古語では「碎くる波」です

これは下二段活用動詞の下一段化の現象に関わっています。たとえば「碎く」という動詞ははじめは自動詞・他動詞の両方で使われていたのですが、まず自他の区別の重要な従属節を作る連用形語幹に許容態 -e- が入って自動・他動の形での区別が始まり、下表のように変化しました。終止形は従属節を作らないので最も保守的で、鎌倉時代に -ur- の形で許容態を受け入れました。

図Sコ1 動詞が下二段活用になり、さらに下一段活用に変化

はじめ 無記録時代 ↓ ↓	⇒ 碎く kudak- は自動詞・他動詞の区別なく使用。 ⇒ この時期にあったことについての推論は B7 章参照。 (下表内の記号；は語幹内に付加される態を表します。)	自動詞		他動詞
		終止	連体・已然 (未然・命令) 連用	
奈良時代 平安時代	3 形語幹	kudak;Ø-	kudak;ur-	kudak-
鎌倉時代	3 形語幹	終止	連体・已然 (未然・命令) 連用	kudak;Ø-
室町時代 江戸時代	2 形語幹	終止	連体・已然 (未然・命令) 連用	kudak;ur-
現代	1 形語幹	すべて	kudak;e-	kudak-

「未然形・命令形」は「連用形語幹」を使用しますので上の表中では（ ）の中に入れてあります。;ur- は ;e- に統合されました、意味は同じに保たれています。;ur- は「許容態詞-e-」の歴史的に存在した異形態ということになります。

現代語で「碎ける kudak;e-ru 波」というのは、連体形ですから、

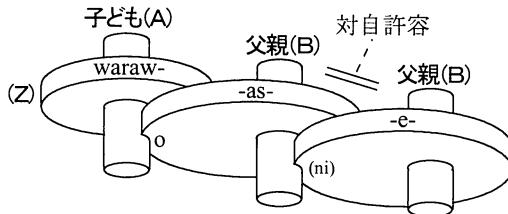
古語では「碎くる kudak:ur-u 波」となっていました。

S3.3 原因態／原因基

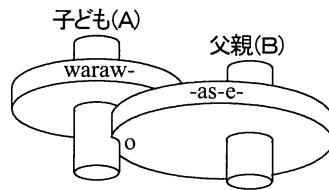
-(s)as- / -(s)as-e-

12.2, 12.5, B2章, B4章

順序としては -(s)as- という原因態を説明することになりますが、現代語では原因基 -(s)as-e- の形で使用することが多いので、ここでは原因基の説明をすることにします。原因基の -e- はすべて B B 対自許容になります。



父親が子どもを笑わせる



父親が子どもを笑わせる

図S3-32 対自許容態の同一実体を別々に図示 図S3-33 同一実体を1つで図示
この2つの構造図は同じことを表しているものとして扱います。

「原因者」(上図の「父親(B)」に当たる -(s)as-e- の主体) のあり方には下表のように、大別して4種類、細別して10種類のあり方があります。
原因者の意志と制御のあり方を▲▽で表示しております (S1.14 参照)。

表S3-2 原因基 -(s)as-e- の分類 …… 原因者の原因としてのあり方で分類

-(s)as-e- の意味		例
t⑤ 直接他動	t⑤a ▲ 意志直接他動	彼は寝ている病人に水を nom-as-e-
	t⑤b ▲ 事態直接他動	彼は風船を hukuram-as-e-
t⑥ 指示他動	t⑥a ▲ 意志指示他動	引率者は班長に人数を kazoe-sas-e-
	t⑥b ▲ 行為指示他動	医師は患者を suwar-as-e-
t⑦ 結果招来	t⑦a ▲ 意図的結果招來	彼は小話で客を tanosim-as-e-
	t⑦b ▽ 非意図的結果招來	彼は息子を8歳で sin-as-e-
	t⑦c ▽ 摂理的結果招來	雨雲が雨を hur-as-e-
t⑧ 不阻止	t⑧a ▲ 許可	彼は娘に車を tukaw-as-e-
	t⑧b ▲ 意図的放置	母親は娘を昼まで ne-sas-e-
	t⑧c ▽ 非意図的放置	運転手は乗客に携帯電話を tukaw-as-e-

原因基の表の①～⑩をひとつずつ見ていきます。

t⑤ 直接他動

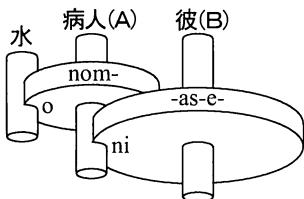
-(s)as-

-(s)as-e-

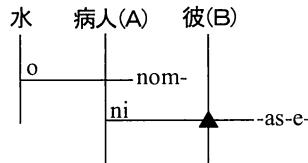
「直接他動」とは、「原因者Bが直接力を使って主体Aと属性との結びつきを実現する」ことをいいます。この-as-e-についてできた動詞は他動詞とも考えられます。

t⑤a 意志直接他動

「に他動」



図S3-34 彼は病人に水を飲ませ(る)



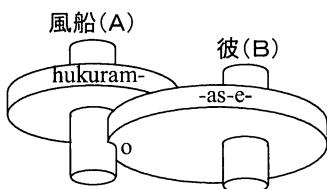
図S3-35

彼Bは、自分の力をを使って病人Aの口元まで水をもっていき病人Aが水を飲むことを実現します。BがAの行動意志に力で直接関わるとみなす場合はAを「に格」に置きます。このときBには意志もあり、制御も可能です（▲）。

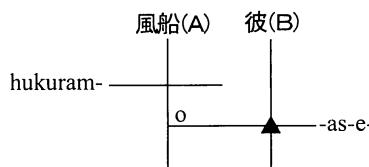
また、他動詞の場合は「を格」の重複を避けるためにもこの形式を使います。

t⑤b 事態直接他動

「を他動」（他動詞の場合、Aは「に格」に置かれます。）



図S3-36 彼は風船をふくらませる



図S3-37

風船Aがふくらむようにするために、彼Bは直接力を使って風船に息を吹き込みます。Aが非情物で、意志も制御も関係がない事態の主体であるとみるとAを「を格」に置きます。Bには意志もあり、制御も可能です（▲）。

Aが有情物でも意志に働きかけることに関心がない場合は「格」に置きます。

例：彼Bは(手を引いて)病人Aを歩かせた。

動詞が他動詞の場合はAを「に格」に置くためにt⑤aと同じ形になります。

問S3-9 「祖父は孫に昔話を聞かせた。」の文の構造を示せますか。

問S3-10 「由紀ちゃんはお人形を座らせた。」は使役の文といえますか。

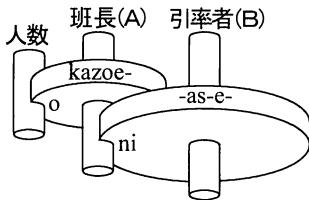
問S3-11 「彼は仕事を済ませた。」の文の構造を示せますか。

t⑥ 指示他動

- (s)as-
- (s)as-e-

「指示他動」とは、「原因者Bが主体Aに指示して主体Aと属性の結びつきを実現する」ことをいいます。
この「指示」による実現が「使役」といわれるものです。

t⑥a 意志指示他動 「に使役」



図S3-38 引率者は班長に人数を数えさせ(る)



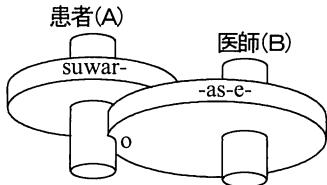
図S3-39

引率者Bは班長Aに「人数を数えなさい。」と指示します。主体Aの「意志」に働きかけるとみなす場合、Aは「に格」に置きますので「に使役」と呼ぶこともあります。

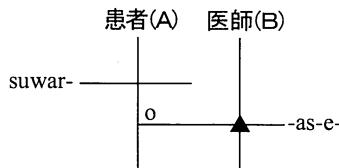
使役者Bには意志があり、制御も可能です(▲)。

動詞が他動詞の場合にはこの形になります。

t⑥b 行為指示他動 「を使役」 (他動詞の場合、Aは「に格」に置かれます。)



図S3-40 医師は患者を座らせ(る)



図S3-41

医師Bは患者Aに「お座りください。」と指示します。主体Aの意志には無関心で、Aを単なる行為の主体とみるととき、Aを「を格」に置きます。それで「を使役」と呼ぶこともあります。動詞が他動詞の場合は、「を格」の重複を避けるためにAを「に」格に置くことから、上のt⑥aと同じ形になります。

使役者Bには意志があり、制御も可能です(▲)。

問S3-12 「母親は息子に／を買い物に行かせた。」の違いは何ですか。

問S3-13 「母親は子どもに水を飲ませた。」のt⑤aとt⑥aの違いは何ですか。

問S3-14 「彼は友人を庭に入らせた。」のt⑤bとt⑥bの違いは何ですか。

問S3-15 「車を走らせた／彼を走らせた。」の違いは何ですか。

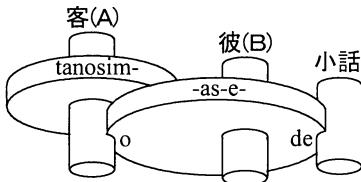
t⑦ 結果招来

-(s)as- / -(s)as-e-

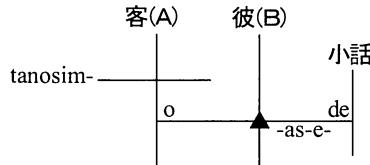
「結果招来」とは、「Bの行為・存在等が原因となって

Aと属性の結びつきを招く」ことをいいます。

t⑦a 意図的結果招来



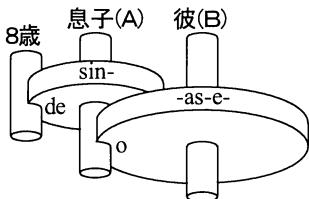
図S3-42 彼は小話で客を楽しませ(る)



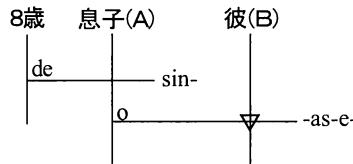
図S3-43

彼Bは客Aを楽しませようという意図をもって小話をし、結果として客が樂します。Bは意志があり、制御も可能です(▲)。

t⑦b 非意図的結果招来



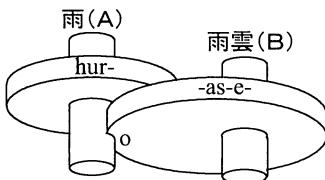
図S3-44 彼は息子を8歳で死なせ(る)



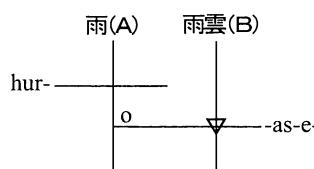
図S3-45

この文の発話者は主観的・情念的に彼Bが息子Aの死の原因者であると捉えています。Bには意志がなく、制御も不可能です(▽)。意志があればt⑦aです。このt⑦bは受影基にも通じています(息子に sin-ar-e-)。

t⑦c 摂理的結果招来



図S3-46 雨雲が雨を降らせ(る)



図S3-47

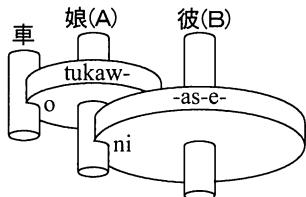
雨雲Bは雨Aの降ることの摂理的原因者で、意志・制御はありません(▽)。

t⑧ 不阻止

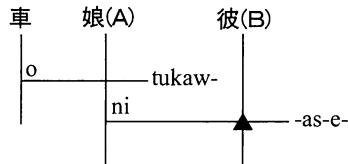
-(s)as- / -(s)as-e-

「不阻止」とは、「Aと属性の結びつきを阻止しないためにBがその原因者とみなされる」ことをいいます。

t⑧a 許可



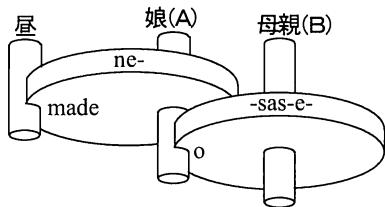
図S3-48 彼は娘に車を使わせ(る)



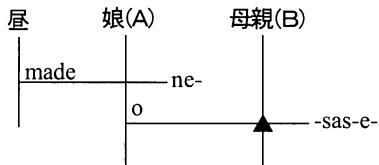
図S3-49

彼Bは車を使いたがっている娘Aに許可を与える形でその出来事の実現を阻止しません。Bには許可をする意志があり、制御もききます(▲)。

t⑧b 意図的放置



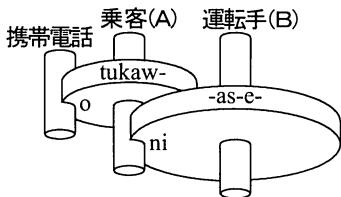
図S3-50 母親は娘を屋まで寝させ(る)



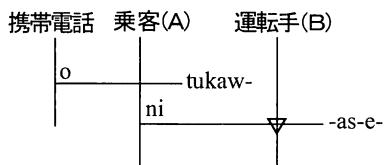
図S3-51

母親Bは娘Aが登山で疲れているのを知っていて、寝たいだけ寝るのがよいと考え、阻止しないで放置します。Bには意志があり、制御もききます(▲)。

t⑧c 非意図的放置



図S3-52 運転手は乗客に携帯電話を使わせ(る)



運転手Bは乗客Aが携帯で話しているのを知らないので阻止しません(▽)。これはt⑦b同様、受影基にも通じています(乗客に携帯電話を tukaw-ar-e-)。

可能の原因基

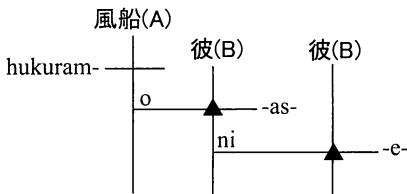
可能の -(s)as-e-

B4. 2

原因態 -(s)as- には「t⑤直接他動」「t⑥指示他動」「t⑦結果招来」「t⑧不阻止」の4つしかありませんが、-e- が加わって原因基 -(s)as-e- になると、それらのほかに「可能」の意味が出てきます。これは -e- が B B 対自のほかに、A B 対他で可能の機能を持つようになるためです(t③)。可能の場合の -e- は無意無制(▽)です。

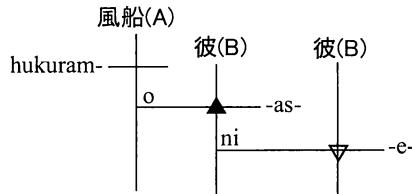
対自可能 -e- が B B 対自。[事態直接他動](非可能)と[可能]があります。

[事態直接他動(t⑤b)] (非可能)



図S3-54 彼が風船をふくらませる
-e- は態補強(t④)

[対自可能] (可能)

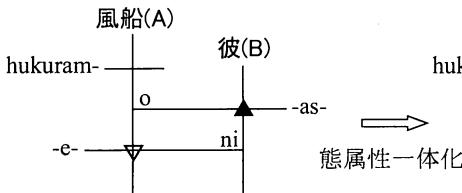


図S3-55 彼が風船をふくらませる
-e- は可能(t③)

対他可能

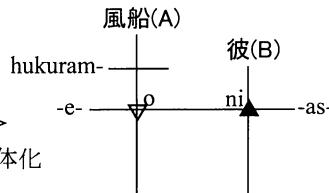
-e- が A B 対他の場合、[可能]になります。態属性が一体化するように感じられると複主体になります。

[対他可能] (可能)



図S3-56 彼に風船がふくらませる
-e- は可能(t③)

[対他可能……二重主格] (可能)



図S3-57 彼が風船がふくらませる
-e- は可能(t③)

問S3-16 「彼は耳を／が動かせる」はどのように異なりますか。

問S3-17 「彼を待たせる」は可能の意味になるときがありますか。

問S3-18 「彼は彼女を笑わせた。」にはどのような笑わせ方がありますか。

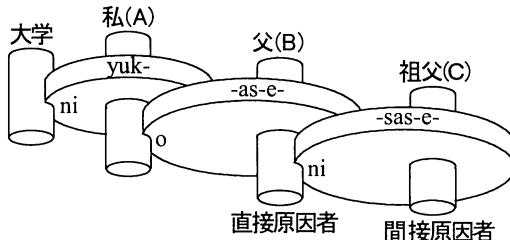
二重原因基

-(s)as(-e)-(s)as(-e)- ア), イ)の2つの場合があります。

12.5

ア) 二重原因基として正確に使用する場合

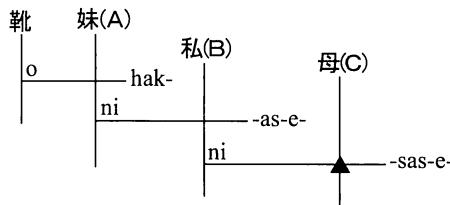
直接原因者(B) : 父
間接原因者(C) : 祖父



図S3-58 祖父が父に私を大学に行かせさせた(た)

二重原因基は上のような二重使役の形でたまに使用されることがあります。次の例では妹が幼児で、 hak-as-e- が事態直接他動であることが考えられます。

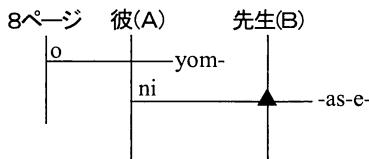
直接原因者(B) : 私
間接原因者(C) : 母



図S3-59 母は私に妹に靴をはかせさせた(た)

イ) 原因基のつもりで二重原因基を使用する場合

「先生は彼に8ページを『読ませた』。」と言うつもりで『読ませた』と言うことがあります。これは図S3-61に見るように原因態を過剰に使用しているもので、「サ入れ」現象といわれています。



図S3-60 8ページを読ませた(た)



図S3-61 8ページを読ませた(た)

これは「先生」を対自指示他動とするア)の形式で解釈することもできます。

問S3-19 「彼は彼女を怒らせた。」をt⑦aとt⑦bで説明できますか。

問S3-20 「彼は息子に酒を飲ませた。」をt⑤, t⑥, t⑦, t⑧で説明できますか。

問S3-21 「飲ませ(た)/飲ませ(た)/飲ませさせ(た)」を説明してください。

次ページから 「S3.4 受影態／受影基」 です。

コラム2

B9章

態拡張による新動詞の発生

日本語の動詞は数が限られていきましたが、態の適用により同じ動詞からいくつかの動詞が作られ、数が増えました。これを態拡張とよびます。態拡張の方式は現在のところ次の12種類に分類されています。方式[2]は「態変換」で、[3]は「態補強」です。[12]では非〇格客体が主体化されます。(詳細はB9章参照)

表Sコ2 動詞の態拡張12方式

方式	原自動詞	態拡張	拡張後動詞	原他動詞	態拡張	拡張後動詞
1	自 ugok-	Ø	自 ugok-	他 kudak-	Ø	他 kudak-
2	自 ak-	e	他 ake-	他 kudak-	e	自 kudake-
3	自 mor-	e/i	自 more-	他 saduk-	e/i	他 saduke-
4	自 yasum-	ar	自 yasumar-	他 atum-	ar	自 atumar-
5	自 uk-	are	自 ukare-	他 um-	are	自 umare-
6	自 ugok-	as	他 ugokas-	他 sir-	as	他 siras-
7	自 urum-	ase	他 urumase-	他 mot-	ase	他 motase-
8	自 ni-	se	他 nise-	他 mi-	se	他 mise-
9	自 tat-	as	自 tatas- [敬語]	他 nuk-	as	他 nukas-
10	自 ir-	ase	自 irase- [敬語]	他 kik-	ase	他 kikas- [敬語]
11	自 sak-	aye	自 sakaye-	他 mi-	(a)ye	自 miye-
12	自 nak-	xx	自/他 nake-	他 saduk-	xx	他/自 sadukar-

1つの動詞から複数の新しい動詞が生じる一例として「sir- 知る」を挙げてみます。この動詞からは[2]sire-, [6]siras-, [7]sirase-という動詞が生じています。

問S3-22 「我々は今回対戦チームに勝たせたが……」を説明してください。

問S3-23 「寒気が滝を凍らせた。」を説明してください。

問S3-24 「あす、休ませてください。」の構造を示してください。

問S3-25 「A社は外注業者に顧客データを流出させた。」を説明してください。

S3.4 受影態／受影基

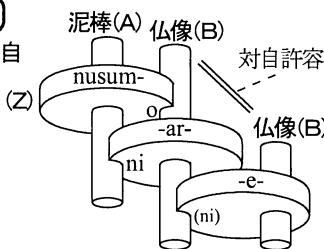
-(r)ar- / -(r)ar-e-

12.3, 12.5, 12.7

受影態 -(r)ar- は現代語では受影基 -(r)ar-e- の形で使用されることが多いので、ここでは受影基について説明します。対自受影基と対他受影基があります。

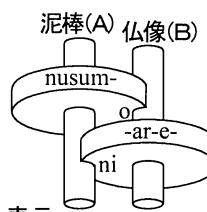
対自受影基

-e- は BB 対自



→ 合一表示

図S3-62 仏像が泥棒に盗まれる

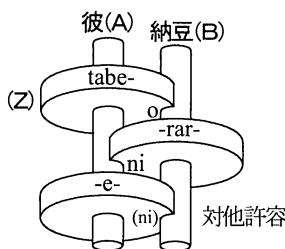


図S3-63

対自受影基では -e- が対自なので、-(r)ar- と -e- を合一表示します。

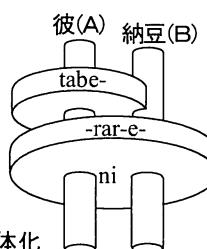
対他受影基

-e- は AB 対他



→ 二主体化

図S3-64 彼が納豆を食べられる



図S3-65 彼に／が納豆が食べられる

対他受影基では -e- が対他なので二重主語も発生します。

表S3-3 受影基 -(r)ar-e- の分類 …… 何がどう受影するかで分類

-(r)ar-e- の意味		-e- の対自・対他	例
t⑨ 受影	t⑨a 直接受影	対自	息子が先生に sikar-ar-e-
	t⑨b 準直接受影	対自(・対他)	娘が先生に発音を(/が) home-rar-e-
	t⑨c 間接受影	対自	彼が雨に hur-ar-e-
t⑩ 自発		対自	(私には) 昔が sinob-ar-e-
t⑪ 可能		対自・対他	彼に／が納豆が／を tabe-rar-e-
t⑫ 尊敬		対自・対他	先生が資料を yom-ar-e-

t⑨ 受影

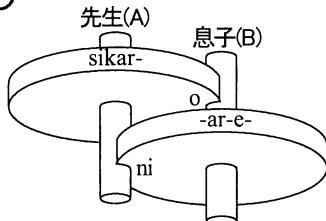
-(r)ar- / -(r)ar-e-

「受影」とは、「Aと属性の結びつきの影響を受影者Bが受け
る」ことをいいます。3種類あります。

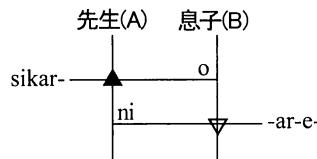
t⑨a 直接受影

対自受影

-e- はBB対自



図S3-66 息子が先生にしかられる



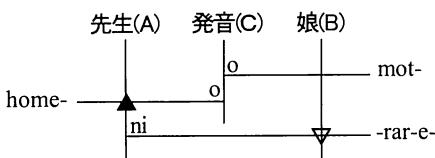
図S3-67

「直接受影」では、B(息子)がA(先生)の目的語(を格)になっています。

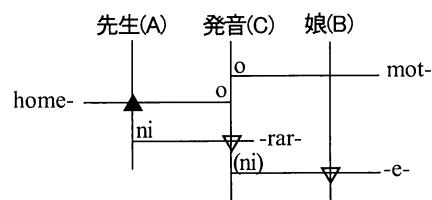
t⑨b 準直接受影

対他受影(-e- がAではなくCに対他)の場合

対自受影(-e- がBB対自)の場合



図S3-68 娘が発音をほめられる(る)



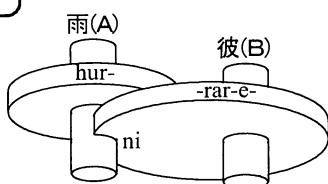
図S3-69 威が発音をノガほめられ(る)

「準直接受影」では、Aの属性の目的語がBの持ち物などのCで、その出来事の影響をBが受けます。-e-がBC対他の場合、-(r)ar-e-は二重主体を持ちます。

t⑨c 間接受影

対自受影

-e- はBB対自



図S3-70 彼が雨に降られる(る)



図S3-71

「間接受影」では、Aの属性とBは出来事上の直接の関係がありません。Bをわざわざ持ち込んだのはBの迷惑な気持ちを強く表現するためです。

問S3-26 なぜ「塀が作られ(た)」より「塀をつくられ(た)」の方が迷惑なのですか。

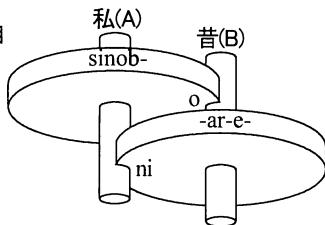
t10 自発

-(r)ar- / -(r)ar-e-

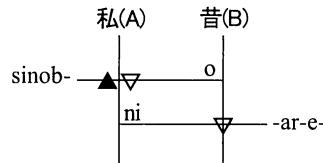
「自発」とは、「Aの心理内において、自然のなりゆきとしてAと感情を表す属性動詞との結びつきの影響をBが受ける」ことをいい、語順に特徴があります。

対自受影

-e-はBB対自



図S3-72 (私には)昔が愒ばれる(る)



図S3-73

「自発」は「直接受影」と同じ構造ですが、動詞が「しのぶ・思う・考える・思い出す・悔やむ・案じる」等の心の動きを表現するものになっています。

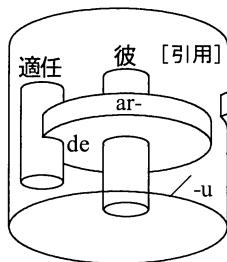
語順は次のようにになります。「Aには」の部分が省略されることも多いです。

Aには(B)が [動詞] -(r)ar-e-

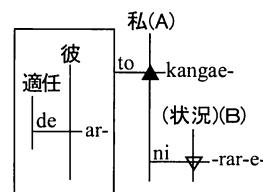
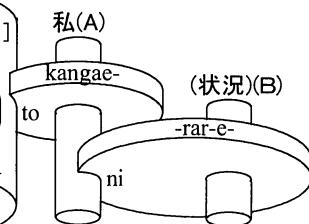
「[引用部]」と考えられる・思われる

対自受影

「私₀」は〈彼が適任だ〉と考える」という表現の私(発話者)を主語ではなく「に格」の「私には〈彼が適任だ〉と考えられる」とすると客観性が高まります。



図S3-74 私には(彼が適任だ)と考えられる(る)



図S3-75

引用部分〈彼が適任だ〉は全体が1つの実体(名詞)として「と格」に置かれます。この構造の特徴は-(r)ar-e-の主体Bが表現されないことで、Bが何であるかを特定することはできませんが、「状況」か何かの概念であるはずです。

「～と思われる／疑われる」なども同じ構造で扱えます。

問S3-27 「結論が急がれる／待たれる。」はどう説明しますか。

問S3-28 「彼の優秀さが認められる。」を受影と自発と可能で説明できますか。

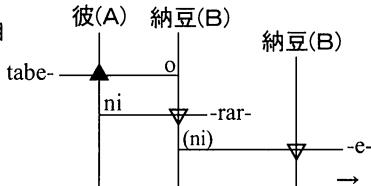
t(1) 可能

- (r)ar-e-
-e- が必須

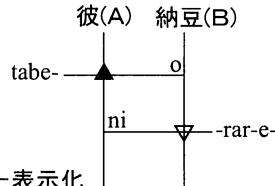
「可能」とは、「Aと属性との結びつきから目的語Bが受影することをBないしAが許容すること」をいいます。Bによる許容は対自可能、Aによる許容は対他可能です。

対自可能

-e- が BB 対自



図S3-76 彼に納豆が食べられる(る)



図S3-77

動詞が tabe-, mi- のような母音末の場合にこの構造になります。t⑨の受影と同じですが、t⑨では -e- が「態補強」で、こちらでは -e- が「可能」です。

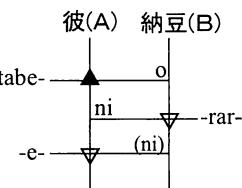
yom-, kak- のような子音末動詞の場合は、この構造もありますが、現代語では -ar- が省略されて -e- だけになります。yom-ar-e- → yom-e- (t③参照)

母音末動詞の場合、-rar- の省略では r が必要となり、「ラ抜き」といわれます。

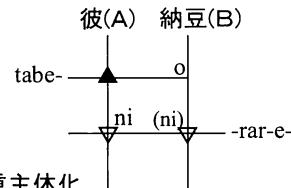
taberare- → ? tabe-r-e- / sodaterare- → ?? sodate-r-e-

対他可能

-e- が AB 対他



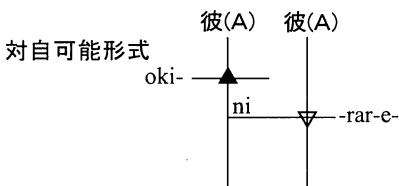
図S3-78 彼が納豆を食べられる(る)



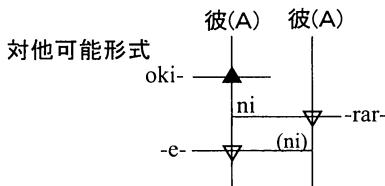
→ 二重主体化

図S3-79 彼が納豆が食べられる(る)

[動詞が自動詞の場合]



図S3-80 彼に(は)起きられる(る)



図S3-81 彼が起きられる(る)

問S3-29 「彼に納豆を食べられる」が「可能」でない理由を説明してください。

t⑫ 尊敬

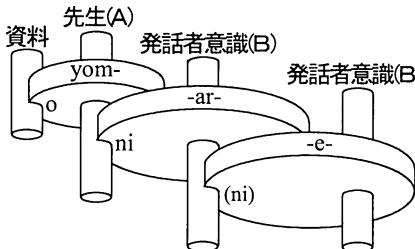
- (r)ar-e-
- e- が必須

「尊敬」とは、「Aと属性との結びつきの影響を発話者意識Bが受けることをBないしAが許容する」ことをいいます。
対自許容尊敬はBが、対他許容尊敬はAが許容します。

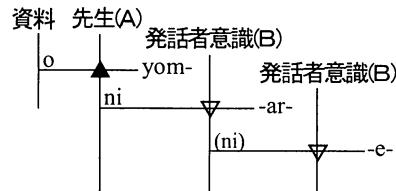
対自許容尊敬

-e- がBB対自

「対自許容尊敬」といっても話者自身の尊敬ではありません。



図S3-82 先生には資料を読まれ(る)

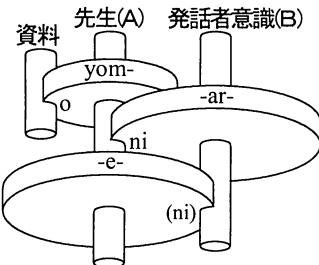


図S3-83

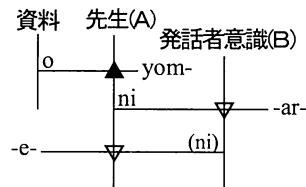
発話者意識Bはことばで表現されることはありません。

対他許容尊敬

-e- がAB対他



図S3-84 先生が資料を読まれ(る)



図S3-85

発話者意識Bはことばで表現されないので二重主語にはなりません。

[尊敬4動詞]

なさる nas-ar-

nas- : 行う

くださる kuda.s-ar-

kuda.s- : 物を下付する

おっしゃる osshar- ← oh;os;e-rar-

oh;os;e- : 言いつける

いらっしゃる irasshar- ← ir;as;e-rar-

ir;as;e- : お入りになる

尊敬4動詞は受影態 -(r)ar- の段階で動詞として定着したものです。あたかも1動詞として扱われ、動詞主体を主語として描写できます。(答S3-30 参照)

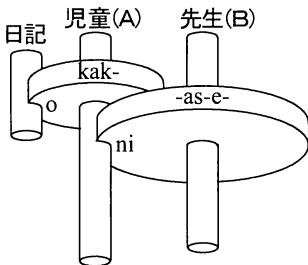
問S3-30 「ござる gozar-」はなぜ尊敬動詞に入らないのか説明してください。

原因受影基

-(s)as(-e)-(r)ar-e- / -(s)as-e-sas-e-rar-e- 原因基と受影基の合成 12.5

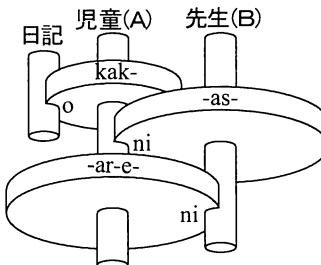
原因受影基

-(s)as(-e)-(r)ar-e- (使役受動基)



先生は児童に日記を書かせ(た)

図S3-86 原因基(-as-e-)



児童は先生に日記を書かされた(た)

図S3-87 原因受影基(-as-ar-e-)

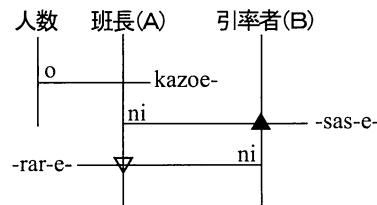
原因受影基では、主語が原因者(指示者)Bから被指示者Aに変わります。

上の例のように原因基 -as-e- の -e- が省略されることもあります。



引率者は班長に人数を数えさせ(る)

図S3-88 原因基(-sas-e-)



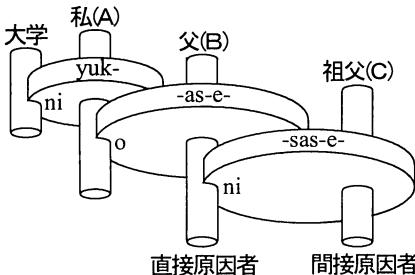
班長は引率者に人数を数えさせられた(る)

図S3-89 原因受影基(-sas-e-rar-e-)

二重原因受影基

-(s)as-e-sas-e-rar-e-

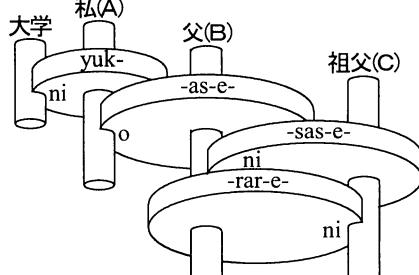
(二重使役受動基)



直接原因者 間接原因者

祖父が父に私を大学に行かせさせ(た)

図S3-90 二重原因基(-as-e-sas-e-)



父は祖父に私を大学に行かせさせられた(た)

図S3-91 二重原因受影基(-as-e-sas-e-rar-e-)

二重原因受影基では主語が間接原因者Cから直接原因者Bに変わります。

コラム3

1章, 4.1, 26.2

立体モデルの誕生

日本語構造伝達文法では立体モデルを使って考察をしますが、その立体モデルは次のような考え方によって誕生しました。

[判断の基本は集合論]

生物は不斷に判断を行って生きています。単細胞のアメーバでさえ、食用となる他の微生物を何らかの信号情報に基づいて食用物の集合に属するものと判断して摂取していると考えられます。



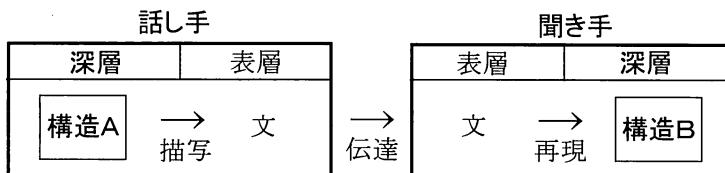
図Sコ3-1 アメーバ

[深層にある判断構造]

すべての生物に原理的に共通する「判断」は、意識より下の本能的な「深層」にある集合論的な判断の構造に基づいて行われるものと考えられます。この判断構造は意思で自由に改変することができない、安定した普遍性の高いものです。

[判断構造を他者に伝える……描写して文の形で伝達]

その判断構造は深層にあるので、ある判断を他者に伝える場合、そのまま示すことはできません。それで、人間の場合は構造のありかたを描写して「表層」の文の形にして他者(や自分)に伝えます。聞き手はこの文を聞き、話し手の深層にある判断の構造を自分の深層に再現して、話し手の判断の内容を理解します。

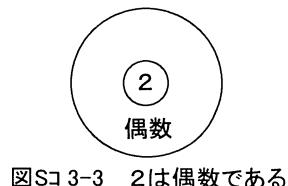


構造Aと構造Bが同じになれば、判断の伝達は成功したことになります。

図Sコ3-2 判断構造Aを描写して文の形で伝達する

[判断を示す古典的モデル]

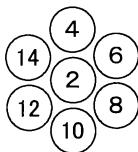
最も基本的な判断は「2は偶数である。」「AはBである。」の形をしています。この判断は昔から右図のような、「2」が「偶数」の集合の元であるということを意味する集合図で示されてきました。



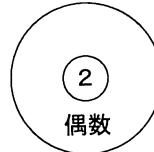
図Sコ3-3 2は偶数である

[古典的モデルから新しいモデルを生みだす]

「2は偶数である。」という判断は下の左図のように表すことができます。しかし、この表し方ではすべての偶数を書き出す必要があります。無限に存在する偶数をすべて書くことは不可能なので、右図のような略図が用いられるわけです。



図S3-4 2は偶数である



図S3-3(再)

「2, 4, 6……」がこの集合の元として共通しているのは「偶数である」という属性を持つからで、これを示すには下の左図での表現がより適切です。それで、判断は右図のように表示されます。（「属性」は文中で「述語」になります。）

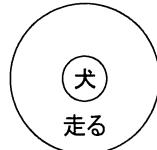


図S3-5 2は偶数である



図S3-6 [主語]は[述語]

そこで、「犬は走る。」という判断を「『走る』属性を持つもの」の集合としてモデル化します（下左図）。「犬はほえる。」も同じです（下右図）。

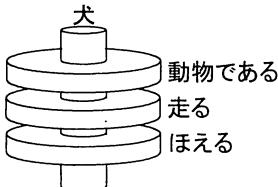


図S3-7 犬は走る

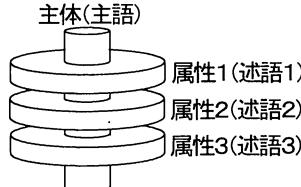


図S3-8 犬はほえる

さらに、図を立体化して、複数の属性を同時に持つことを一挙に示します。

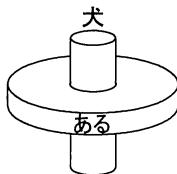


図S3-9 犬は……

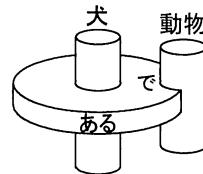


図S3-10 [主語]は[述語]

「犬は動物である。」の「動物である」は「動物・で・ある」という3つの要素から成り立っています。「動物」は「犬」と同じく名詞であり、「ある」が本来的な属性です。「で」は「として」の意味の「格」(名詞を動詞に結びつける力)です。これを下図のように表示します。

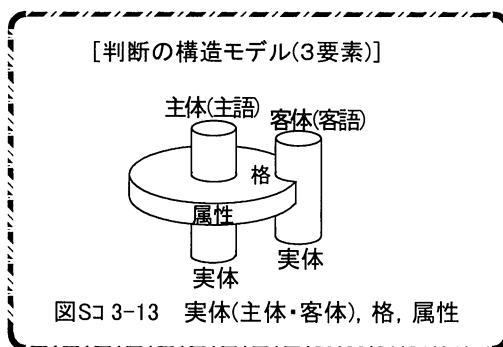


図S3-11 犬は ある



図S3-12 犬は 動物・で・ある

それで、判断の構造は3要素の関わるものとして下図のように一般化できます。



図S3-13 実体(主体・客体), 格, 属性

「動物である」の「動物」は「主体」(主語)ではなく、「客体」(客語)です。主体と客体の両方を「実体」とよびます(本書「S1.2 基本構造」参照)。

[属性]

この文法で言う「属性」は哲学で言う「属性」と異なっています。

哲学では普通、それに固有の性質を言うが、情報科学などでは、一時的にそなえる場合も含めて対象の特性を言う。

『岩波国語辞典』(第7版新版)の「属性」の項

文法は情報科学に属するものです。つまり、たとえば哲学的には「降る」という属性を恒常に持つ「雨」であっても、情報科学であるこの文法では、発話者の認識状況に応じて、肯定の「降る」と否定の「降らない」の両方を属性として持つ可能性があるわけです。

このようにして、古典的モデルから新しいモデルが誕生しました。